

ダバッチ
——ヤップ島に建設された離島民の新たな集落——

田島 康弘

**Dabach, New Settlement, Constructed for
Outer Islanders of Yap in Micronesia**

Yasuhiro TAJIMA

Abstract

The author examined the new settlement, Dabach, which was constructed for outer islanders of Yap state in Yap island, Micronesia, and he tried to gather materials and to interview state government officials in order to understand aspects such as the construction processes of this new settlement.

The author also prepared questionnaires and interviewed every household head in this new settlement to determine the actual situation such as the characteristics of residents and their opinions, paying particular attention to spatial aspects of this new settlement.

The followings are the results.

- 1 The state government started planning the new settlement in 1988 for outer islanders and the first residents moved in in 1993.
- 2 One of the purposes of constructing Dabach is the relocation of Madrich residents to Dabach. However, this relocation has not proceeded very far, because Dabach residents must commute a long distance to Colonia, and the families lack funds for constructing houses in Dabach.
- 3 There were twenty families and sixty-six residents in the period of our investigation. Many of them were from Woleai atoll.
- 4 Only a third of the residents intend to live there permanently. This means Dabach still has the characteristics of a temporary residence.
- 5 Two public houses and six private houses have been constructed in the new settlement. Around these houses there are small fields and gardens for crops and vegetables.

Key words: Madrich, temporary residence, Woleai, public house, vegetable garden

1. 研究目的

筆者はヤップ（Yap）調査隊の一員として、1999年10月、ヤップ島に向かった。筆者のテーマは移民または人の移動であった。先行研究には離島民のヤップ本島における滞在地＝集落であるマドリッチを調査したものが¹⁾、船を下りて、現地

の新たな状況を知るまでは、このマドリッチのその後の変化を調べてみようと考えていた。

しかし、現地コロニア (Colonia) に着き、州政府、観光協会など現地の人々から、近年の新しい状況や変化について知ることになった。とりわけ、離島民の新たな居住地としてダバッチ (Dabach) が建設されたことは筆者にとってはビッグニュースであった。ダバッチに関する情報は、日本では全く知ることができなかった。急遽、研究・調査の計画を基本的に再検討し、最終的には今回の調査対象としてマドリッチよりもダバッチの方がより適切であると決断するに至った。

時間的な余裕があれば、マドリッチについても調査するつもりであったが、さらにもう一つ別のテーマ、すなわち、マドリッチやダバッチ以外の本島部にも離島民が意外に多く住んでいる²⁾ ことを次第に知るようになり、こちらのテーマをマドリッチの調査よりも優先させたため、結局、マドリッチの調査をする余裕はなかった。

次に、ヤップ研究における筆者の基本的な研究視点について述べておこう。

第一は、人の移動、移民の現象に「こだわる」ことである。「こだわる」理由は、これが地理学の基本的視点の一つであるからであり、また、とくに太平洋の社会では、この現象が顕著でかつ重要な現象の一つとされているからである。

第二は人の移動、移民の現象を通して、ヤップ社会の構造や変化の方向を見つめ、その現段階を認識することである。ヤップ社会の構造や変化を知るには様々なアプローチがあり得るが、人の移動の側面からアプローチすることにより、他のアプローチからは得られないものを重視したいのである。今回の調査では、離島民の本島への移動、本島居住を主な対象としているが、離島と本島との間には特定の社会関係が存在していることが既に指摘されており³⁾、人の移動の現象もこうした関係の中で行われていることは言うまでもない。

第三は認識の空間的側面を重視することである。一般に社会科学において、とくに日本では空間的側面が軽視されていることを指摘しても良いであろう。確かに、「空間」は社会の運動法則の主様な側面ではないかも知れない。しかし、全ての社会現象は時間と空間の中で現象しているものであり、空間の側面がもっと正当に評価されても良いのではないだろうか。ただ、この点については、筆者も未だ探求の過程にあり、あるべき姿を確立している訳ではないのではあるが。

本研究は、以上のような視点を踏まえた上で、ヤップ本島における離島民の新しい集落であるダバッチ集落について、その実態を把握することを目的とするものである。

実際の調査では、アンケート調査票を作成し、ダバッチに居住する各世帯主に対して、面接によるアンケート調査を実施した。アンケートの結果については第三章に纏めて示した。

2. ダバッチ集落の形成

2.1. 集落建設の経過

マドリッチの首長、イグナシオ・ハプセイ (Ignathio Hapthey) 氏他からの聞き

取りによれば、ダバッチに離島民のための集落が作られると言う話が始まったのは、1988～89年の頃である。その後州政府により、ダバッチの該当する土地を所有している数人のヤップ人地主から土地の買収が行われ、やがて家が建てられて、はじめて離島民が住むようになったのは1993年頃であった。一般に、この頃から従来は行われていなかった私的な土地の売買も行われ始めてきており、金銭的な感覚、金に対する価値観の変化の進展が、これらの背景にあることが推測される。

ダバッチの広さは9エーカー（約36,000㎡）で、マドリッチが1エーカーなのでその9倍の面積がある。この土地は以前3区画に分かれており、2人のヤップ人によって所有されていたと言う。このうちの1人はトミル（Tomil）のチーフであった。また、この土地はランク⁴⁾としては大変低いランクの土地であったと言われている。ヤップ州政府はこの9エーカーを6万ドルで買収し、離島民の居住のために確保したのであった。

一般に、ヤップ社会では、土地の金銭による売買は従来はほとんど行われてこなかったが、なぜこの時期に、政府によるとは言え土地の売買が行われたのであろうか。その理由は、まず第一に購入者が政府であったことがあげられよう。公的機関が公の理由で行ったために、これが実現したのであろう。第二は政府の中にこれを推し進める強力な力が存在したことが挙げられよう。州憲法の規定により、知事か副知事かのどちらかが離島人でなければならないことが規定されており、当時副知事であったトニー・タウリルマン（Tony Tawrilman）氏の果たした役割が大きかったことが推測される。ちなみに離島出身のトニー氏の副知事の任期は、一期が四年で1987年から1995年までの2期間であり、ちょうどこの間にダバッチ建設が進展したのであった。しかし、さらにこれらの根底には、第三の理由として当時のヤップ社会において、貨幣経済、これに伴う金銭感覚が全体として次第に強く浸透してきたことが挙げられるように思われる。ちょうどこの頃から、私的、個人的なケースでも土地の売買が見られるようになったことが、この一つの現れとして挙げられよう⁵⁾。

その後、上水道の工事も行われた。コロニアから北へ向かう幹線道路を進み、ダバッチ集落へ入る道を右折するとすぐ右側に大きな貯水タンクが建設されている。これがダバッチ集落民のための貯水タンクである。貯えられる水は幹線道路より北側の地点において電力で地下水を汲み上げ、導水したもので、こうした工事もダバッチ集落建設の開始と共に行われたのであった。

また、1987年の人口統計によると、ダバッチには33人の居住者がいた。当時はまだ離島民のダバッチ集落は建設されていなかったため、これらは全て既存のヤップ人であり、また、その頃の状況を示す地図を見ても、数軒の家屋の印がダバッチ地区に記載されている。さらに現地でも、ダバッチに向かう道の途中で、既存住民の家屋の存在を確認することができる。言い換えると、ダバッチ地区は決して無人の地区であったわけではなく、一定数のヤップ人が居住していた地区であった。

移住した離島民とこうした先住の地区民との関係の問題も、離島民によるダバッチ集落の形成や発展に影響を及ぼす重要な要素である。後に述べるアンケート調査の結果によれば、ダバッチ集落への移住が進まない一つの要素としてこの点が挙げられている。

ダバッチ集落の建設の経過については以上であるが、ここで、その後より広大な

土地が離島人によって購入されたことについても触れておこう。聞き取りによれば、ダバッチ集落の北西のガルゲイ(Gargay)地区の44エーカーが離島の人々によって購入されたという。この面積はダバッチの5倍、マドリッチの44倍の広さである。「ヤップネットワーク」⁶⁾によれば、これを購入したのはウォレアイとサタワルの人々で、その値段は25万ドルであるが、報道時点で支払われた金額は11万ドルだけであったと言う。また、道路が建設中とも言われるが、筆者の調査時点では幹線道路からうかがう限り、未だほぼ原型のままで、ほとんど建設らしきものは行われていなかった。しかし、もしここに離島民が住めるようになったら、状況はかなり変わることも予想される。

2.2. マドリッチからの移転をめぐる諸問題

マドリッチは戦後、教会の借地の上に誕生した集落で、その後政府による埋め立て地の造成などが行われて、現在に至っている。離島民のための一時的な居留地としての性格は、少なくとも名目上は一貫している。10年前、州政府はこのことをマドリッチ住民に告げ、1999年の10月までにマドリッチから立ち退くことを要請していた。しかし、マドリッチ住民から見ると、ことはそう簡単ではなかった。離島民が住むことのできるマドリッチの9倍もの広さの土地がダバッチに確保されたとはいえ、様々な問題が指摘されることになった。以下、これらを列挙しよう。

1) ダバッチは仕事場、病院、子供の学校のいずれにおいてもコロニアから遠く、不便である。仕事場の多くはコロニアにあり、そこから離れることは通勤しなければならないことを意味する。自家用車を所有できるものはきわめて少ない。政府は朝、行き1便、午後、帰りの1便の乗合バスの便を運行する計画を提示しているが、この計画では最低15人の乗客を必要とし、1便だけで問題が解決するかどうか疑問である。また、コロニア北部にある病院への通院はこのバスだけでは不十分であろう。子供が通う学校も現在ダバッチには存在せず、公立学校へは遠方に通うことになる。ただ、学校への通学に関してはスクールバスによる解決策があるかも知れない。

2) 第2は、家の建設資金の問題である。マドリッチに住む多くの者にとって、ダバッチに家を建てるための資金がない。また、ダバッチに借家が建設されたとしても、その居住に必要な家賃を支払えない状態である。これに対し、政府は家を建てようとする人達のために「YAPCAP」ローンを「5万ドルに増やした」とされ、何人かの人々がこれを使っていると言われるが、これを借りられる人がどのくらいいるのであろうか。

3) 第3は、仮に家が建てられ通勤が可能になったとしても、もし、今のマドリッチの住民の全てがダバッチに移住したとしたら、それこそ今度はダバッチが、現在のマドリッチのような悪い居住環境になってしまうだろう、と言われていることである。ダバッチはマドリッチの9倍の広さであるとはいえ、現在のマドリッチは1エーカーすなわち約4000m²に数百人が居住する超密集居住地区であり、この全てが移動すればダバッチの居住環境も決して快適とは言えなくなることは目に見えている。

4) さらに、既存のヤップ人住民との関係が必ずしも友好的でないとの声も聞かれることが、不安材料の一つである。他方、現在既にダバッチに居住している者から

すると、ダバッチは平和で静かであり、ガーデニングもできるし、眺めも良く、住むには素晴らしい場所であるとの評価も示されているが、上述のような問題も指摘されており、前途を見つめる必要がある。

3. ダバッチ集落の住民 ——アンケート調査結果——

筆者ら⁷⁾は鹿児島大学多島圏研究センターが組織したヤップ調査隊の一員として、1999年10月から11月にかけて、ヤップ本島における離島民の調査を行った。この際の調査の一つの中心が新集落ダバッチの調査であった。10月21日の班全体でのヤップ島の概査の後、22日筆者らはマドリッチの首長に面会して、ダバッチ調査のための協力を依頼し、マドリッチの2人の案内者と共にダバッチ集落に向かった。22日は集落の概況の把握、23日は全世帯の氏名の把握をそれぞれ行い、24日から26日までの3日間で、全世帯主に対するアンケート調査を実施した。以下に示すものはこれらの調査結果である。

全体の概況を示すと、世帯数は20世帯、総人口は男35人、女31人、計66人である。調査内容は、1、ダバッチ居住に関わる基本的事項、2、世帯主の意向を尋ねた事項、3、その他の補足的事項、の3つに分けられる。以下、これらの各々について述べる。

3.1. 基本的事項

ダバッチ集落を捉える基本的事項として、筆者は次の6項目を調査内容として設定した。

- 1) 人口の性別・年齢別構成
- 2) 出身地(出身島, 出身集落)
- 3) 来住年
- 4) 移動手段および移動形態(随伴者)
- 5) 移動回数
- 6) ヤップ本島への移動歴

以下、これらについて述べよう。

1) 住民の性別・年齢別構成(図1)

離島人口全体の性別・年齢別特徴(すなわち人口ピラミッド)は、いわゆる典型的なピラミッド型である。これと比べるとダバッチ居住者は

- ① 高齢者と子供が少ないこと
- ② 男性中年層がやや多いこと

などがわかる。

上記の特徴は新たに建設された集落として整合的なものであると言えよう。

2) 出身地(表1)(表2)

ダバッチ居住者66人の出身地を見ると、ウォレアイ、ユーリピク(Eauripik)、イファリク(Ifalik)のウォレアイ語圏で71.2%を占め、その中でもウォレアイが60.6

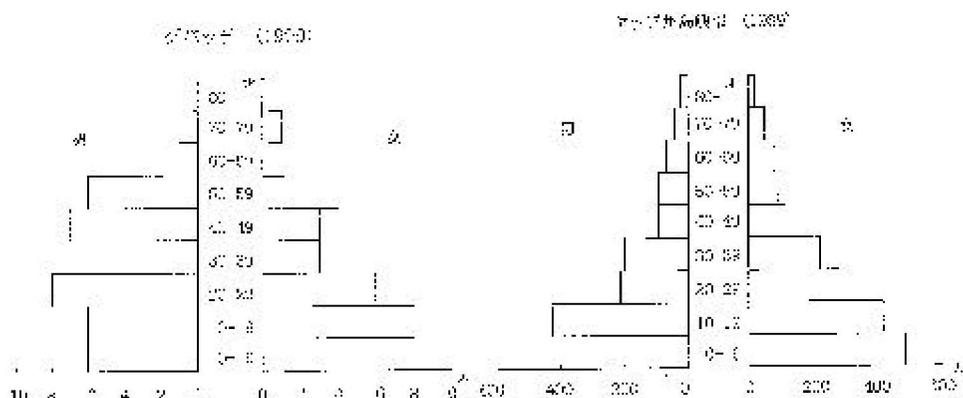


図1 ダバッチの人口ピラミッド

表1 ダバッチ住民の出身島嶼

	男	女	計	割合 (%)	人口	割合 (%)
Ulithi	2	3	5	7.6	847	0.6
Ngulu					26	
Fais					254	
Woleai	21	19	40	60.6	789	5.1
Eauripik	3	3	6	9.1	101	5.9
Falaulep					175	
Ifalik	1		1	1.5	472	0.2
Elato	3	1	4	6.1	70	5.7
Lamotrek					255	
Satawal					466	
Yap Proper	2	4	6	9.1		
Chuuk		1	1	1.5		
Saipan	3		3	4.5		
計	35	31	66	100.0		

注: 人口出典: 1987. Yap State Census of Population

表2 ウォレアイ出身者の出身集落

	男	女	計	割合 (%)	人口	割合 (%)
Falalap	5	2	7	17.5	393	1.8
Falalus	3	4	7	17.5	86	8.1
Wottagai	7	5	12	30.0	166	7.2
Tagailap					68	
Siliap	6	8	14	35.0	76	18.4
計	21	19	40	100.0	789	

%と極めて多くなっている。これは、ダバッチが建設された時点の副知事トニー氏がウォレアイ出身で、副知事退職後の現在もダバッチに居住していることと関係があるのかも知れない。離島の総人口との比で見ても、かなりウォレアイが多くなっている。このウォレアイ出身者の出身地をさらに集落別に見ると、絶対数ではシリアップ (Siliap)、ウオタガイ (Wottagai) が多く、集落総人口との比ではシリアップがとくに多く、ファラルース (Falalus)、ウオタガイが次いでいる。しかし、とくにある特定の集落に集中しているような傾向は見られないと言えよう。

3) 来住年 (表3)

来住年の調査結果からは、以下のことがわかった。

- ① 最も早い居住年は1993年であり、この年から居住が可能になったこと。
- ② その後、徐々に居住者が増加していったこと。
- ③ ごく最近来住した者の割合もかなり高いこと。

なお、彼らの定住傾向については、意向の部分で後に検討する。

表3 ダバッチ住民の来住年

年	人数	割合 (%)
1993	9	15.3
94	2	3.4
95	3	5.1
96		
97	10	16.9
98	10	16.9
99	25	42.4
小計	59	100.0
当地で誕生	6	
不明	1	
計	66	

4) 移住時の様子 (表4) (表5)

ここでは移住時の交通機関および移住時の随伴者について検討する。交通機関に

表4 移住時の交通手段

交通手段	人数	割合 (%)
船	53	15.3
飛行機	2	3.4
小計	55	5.1
当地で誕生	6	
不明	5	16.9
計	66	16.9

表5 移住時の随伴者

随伴者	人数	割合 (%)
家族	34	69.4
親戚	2	6.1
一人で	12	24.5
小計	49	
当地で誕生	6	
不明	11	
計	66	

については、飛行機はヤップーウリシー間しか飛んでおらず、従って他の島からの移住者はすべて船（定期連絡船の「マイクロスピリット（Micro Spirit）」）による。従って、船が多くなるのは当然であるが、飛行機が2名存在した。これはウリシー出身者5名のうちの2名である。船は定期船ではあるが、運行日時は必ずしも決まっておらず、この意味では不定期とも言える。飛行機利用者が生まれるのもこうした事情とも関連があろう。

次に、随伴者を見ると、「家族と共に」が約7割で最も多い。しかし、個人のケースも4分の1ほどあり、必ずしも少なくはなかった。

5) 移動回数（表6）

さらに、離島民の移動行動を把握するため、ヤップ本島への今回の来住が何回目の本島行きであるかを尋ねた。その結果、初めてとか2～4回という者もいるが、10回以上、すなわち何回も来たことがあるという者が最も多く、かなり頻繁に移動が行われていることがわかった。

表6 ヤップ本島への移動回数

回数	人数	割合 (%)
はじめて	3	12.0
2～4	5	20.0
5～9	3	12.0
10以上	14	56.0
小計	25	100.0
当地で誕生	6	
不明	35	
計	66	

6) ヤップ本島での滞在歴（表7）（表8）

最後にヤップ本島での滞在歴を、マドリッチでの滞在経験とその他の場所での滞在経験とに分けて尋ねた。その結果、マドリッチでは65.5%、その他の場所では81.5%の者が滞在しており、移動回数の多さと連動していることがわかった。なお、マドリッチよりもその他の場所の方が多いという点はやや意外であった。ちなみに、その他の場所とは、アンケートによりわかった限りではタルグー（Talguw）、ニマー（Nimar）のドノッチ（Donoch）、そしてガギル（Gagil）などであった。

表7 マドリッチでの滞在歴

滞在歴	人数	割合 (%)
あり	19	65.5
なし	10	34.5
小計	29	100.0
当地で誕生	6	
不明	31	
計	66	

表8 マドリッチ以外の本島での滞在歴

随伴者	人数	割合 (%)
あり	22	81.5
なし	5	18.5
小計	27	100.0
当地で誕生	6	
不明	33	
計	66	

3.2. 世帯主の意向

ここでは各世帯主の考えや意向を尋ねた。その内容は

- 1) なぜヤップ本島に来たか
- 2) なぜダバッチ集落に来たか
- 3) ここダバッチ集落での定住の意志

の3つである。

1) ヤップ本島に来た理由 (表9)

判明した18人の結果を見ると、11人は仕事のため、6人は病人の世話や看護のため、残りの1人は研修のためであり、6割以上が仕事のためであった。(なお、仕事の中味では病院や政府の仕事が多かった。)

表9 ヤップ本島への来住の理由

理由	世帯数	割合 (%)
病院での仕事	3	16.7
州政府の仕事	2	11.1
大学の仕事	1	5.6
公立学校の仕事	1	5.6
Y.C.A. ¹⁾ の仕事	1	5.6
その他の仕事	3	16.7
トニー ²⁾ の世話	4	22.2
病人の世話	2	11.1
医療研修	1	5.6
小計	18	100.0
不明	2	
計	20	

注1) Y.C.A. は Yap Cooperative Association
(ヤップ協同組合)のこと

注2) ダバッチに居住する前副知事

2) ダバッチに住むことにした理由 (表10)

ダバッチに来た理由の中で最も多かった答えは「マドリッチが混みすぎているのに対し、こちらは静かで空気も良い」すなわち、環境の良さをあげたもの、および「トニーの世話のため」とが3分の1ずつで最も多かった。環境の良さは十分予測されたが、当時病気であったトニー氏の世話のためとの答えもかなり多かったことは、やはりトニー氏の影響力の大きさを示すものであろう。

3) 定住の意志 (表11)

ここダバッチに、将来にわたって定住するつもりがあるのか否か、について尋ねた結果、定住すると答えたものは3分の1であり、残りの3分の2は遅かれ早かれ島に帰ると答えている。この帰ると答えた者の帰島の時期については数年後とか定年後とかの答えもあるにはあったが、これらは少なく、大部分が6ヶ月以内と答えており、中でも次の船で帰るとする者も少なくなかった。

表10 ダバッチ集落への来住の理由

理由	世帯数	割合 (%)
静かで空気がきれい	5	33.3
トニーに会う	5	33.3
政府が離島民のために作った	2	13.3
官舎から出された	1	6.7
家が借りられた	1	6.7
SDA ¹⁾ の学校に近かった	1	6.7
小計	15	100.0
不明	5	
計	20	

注1) S.D.A.とはキリスト教の一派、Seventh Day Adventistの略

表11 定住の意志

定住の意志	世帯数	割合 (%)
次の船(約1カ月後)で帰る	6	31.6
6カ月以内に帰る	4	21.1
5～6年後に帰る	1	5.3
10～15年後に帰る	2	10.5
定住する	6	31.6
小計	19	100.0
不明	1	
計	20	

以上のことから、現在のダバッチ居住者のうち定住するつもりの方は約3分の1程度あり、多くの者が一時的な滞在者であって、マドリッチと同様に居留地的性格も強いことがわかった。なお、先に、ごく最近の来住者が多いという事実を見たが、この大部分が一時的な滞在者だったのである。

3.3. その他の補足的事項

以上の他、次の3点についても補足的に調査した。

- 1) 車の所有状況
- 2) 物品交換習慣の存在
- 3) 出郷者の調査

1) 車の所有状況(表12)

ダバッチに住む際に、通勤等の移動の手段としての車の所有の有無は重要な要素である。これについて見ると、車を所有している者は約3割で、多くの者は所有していない。ただ、定住の意志を持つ者が3分の1程度であったことを考えると、彼らがほぼ車の所有者であることが考えられる。仕事の場であるコロニアまでは車(または船)なしでは、ほとんど不可能であり、所有していない場合は政府の車、会社の車などがその代わりとなっている。(なお、ボートでもコロニアへ行くこと

ができ、被調査世帯のうちの1世帯は車はないがボートがあると答えていた。)

表12 車の所有状況

車の所有状況	世帯数	割合 (%)
自家用車を所有	5	29.4
共用車あり	1	5.9
なし	11	64.7
小計	17	100.0
不明	3	
計	20	

2) 物品交換習慣の存在 (表13)

次に、離島民の伝統的習慣の強弱を確かめるために、離島民のヤップ本島に対する伝統的な交換儀礼であるサワイ (Sawai) の実施状況について見た。その結果、「これを行っている」が3分の1、「行っていない」が3分の2で、行っていない方が多かったが、3分の1が行っていることも注目される。また、

- ① 家族としてより、コミュニティとして
- ② コミュニティのチーフの判断による
- ③ 毎年必ずではなく、ときどき行う

など、中間的あるいは条件付きともいうべき解答も見られ、移行過程にあることがうかがえた。

表13 物品交換の習慣

交換習慣	世帯数	割合 (%)
行っている	6	33.3
行っていない	12	66.6
小計	18	100.0
不明	2	
計	20	

3) 出郷者の調査 (表14) (表15) (表16)

調査の最後に、各世帯に対して出郷者の有無について尋ねた。18世帯中、出郷者がいない世帯は6世帯だけであり、他の12世帯には出郷者がいた。このうち、7世帯は拡大家族の中の出郷者について、5世帯は核家族の中の出郷者について解答したので、ここではそれらを別々に整理した⁸⁾。

まず、核家族の出郷者を整理したのを見ると、グアムと北マリアナを合わせたものが約4割で最も多く、次いで、ミクロネシア内の他州となった。次に、拡大家族の回答を整理したのを見ると、7世帯で58人の出郷者があり、この中で最も多い行き先は、ミクロネシア連邦内の他州の約33%であり、グアムと北マリアナを合わせた29%、合衆国本土の28%が続き、さらにハワイ州の10%となっている。全体として見ると、主に拡大家族の結果から出郷者の行き先は、1) ミクロネシア連邦内の他州、2) グアムと北マリアナ、3) 合衆国本土、4) ハワイの順に多い

ことが示された。

なお、出郷の目的をわかった範囲で述べると、勉強10、仕事6、軍への入隊1となっていて、「勉強」が「仕事」よりも多かった。また、調査から判明した拡大家族と核家族との主な違いは、いとこやおじが付加される点であった。

表14 各世帯における出郷者の有無

出郷者の有無	世帯数	割合 (%)
核家族内にいる	5	27.8
拡大家族内にいる	7	38.9
いない	6	33.3
小計	18	100.0
不明	2	
計	20	

表15 核家族内出郷者の行先

行先	人数	割合 (%)
ミクロネシア連邦内の他州	2	22.2
パラオ	1	11.1
グアム	2	22.2
北マリアナ	2	22.2
ハワイ州	1	11.1
日本	1	11.1
計	9	100.0

表16 拡大家族内出郷者の行先

行先	人数	割合 (%)
ミクロネシア連邦内の他州	19	32.8
グアム	16	27.6
北マリアナ	1	1.7
ハワイ州	6	10.3
合衆国本土	16	27.6
計	58	100.0

以上、調査結果をまとめると、ダバッチ居住者はウォレアイ環礁出身の青壮年男性が比較的多く、一時的滞在者を除くと、1993年以降、家族形態で次第に増加してきたこと、一般に、離島民は本島との往来をかなり頻繁に行っており、本島滞在時の宿泊地はマドリッチだけでなく、離島民の居住する官舎や個人宅も意外と多いことなどがわかった。また、ヤップ本島へは仕事のために来たものが多く、敷地の広さや空気の良さなど環境の良さでダバッチを選んだものが多い。ただ、車などを所有し、将来にわたって住み着こうとする者は、3分の1程度でしかなく、マドリッチと同様、一時的滞在地、寄留地的性格も強いことがわかった。なお、被調査者世帯には出郷者も多く、その行き先は連邦内の他州やグアムなどが多いが、合衆

国本土も3割近くいて、意外と多いことも把握できた。

4. ダバッチ集落と空間認識

本章ではダバッチ集落をいくつかの空間視点から捉えることにより、ダバッチ集落の理解を深めたい。ダバッチ集落は近年新たに形成された集落であり、その空間的理解はこの集落の理解にとって有効であるのみならず、一般的に言っても欠くことができないとも言えよう。

4.1. ダバッチ集落の位置 (図2)

ダバッチ集落はコロニアの北北東に位置し、直線距離では3km強程度で、コロニアに停泊する船上からもその位置を確認することができる程の距離にあるが、陸上の道路は大きく北に迂回しており、これを通ると約7kmの距離となって、徒歩での通勤は困難な距離である。船(ボート)の所有者も存在したが、船は天候に左右されることもあるせいか、基本的な交通手段は車となっている。このほか、図2ではマドリッチ、ガルゲイなど本稿に登場した関連する地名の位置をも示した。

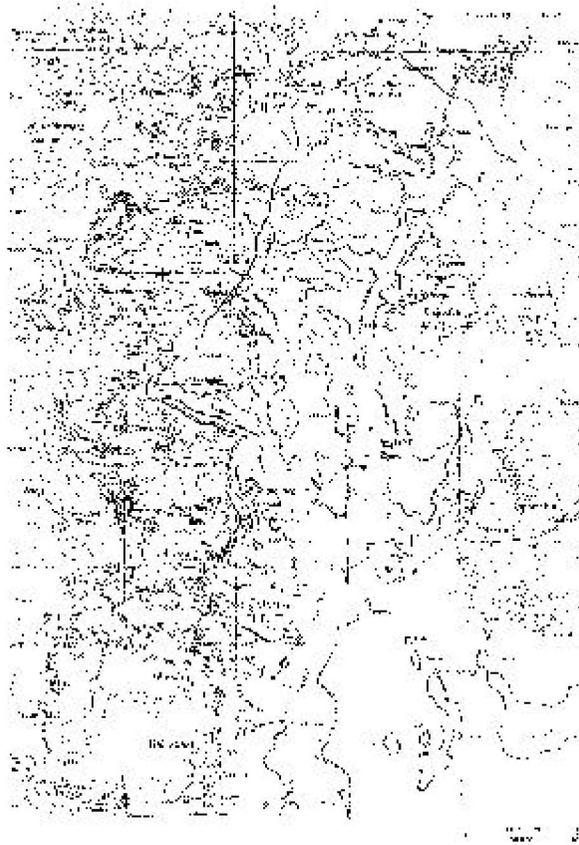


図2 ダバッチ集落の位置

4.2 集落内部の空間認識

次に、ダバッチ集落内部を、1) 建造物の配置と、2) これ以外の土地利用とに分けて考察しよう。

1) 建造物の配置 (図3)

集落内の建造物の中で最も重要なものは住宅である。この住宅は①個人の住宅、および、②公共の住宅の2つに分けられ、前者は6棟、後者は2棟である。次いで、休息小屋や調理小屋が、世帯によっては設置されている。特殊なものとしては、No.10世帯の所有する修理工場や倉庫がある。

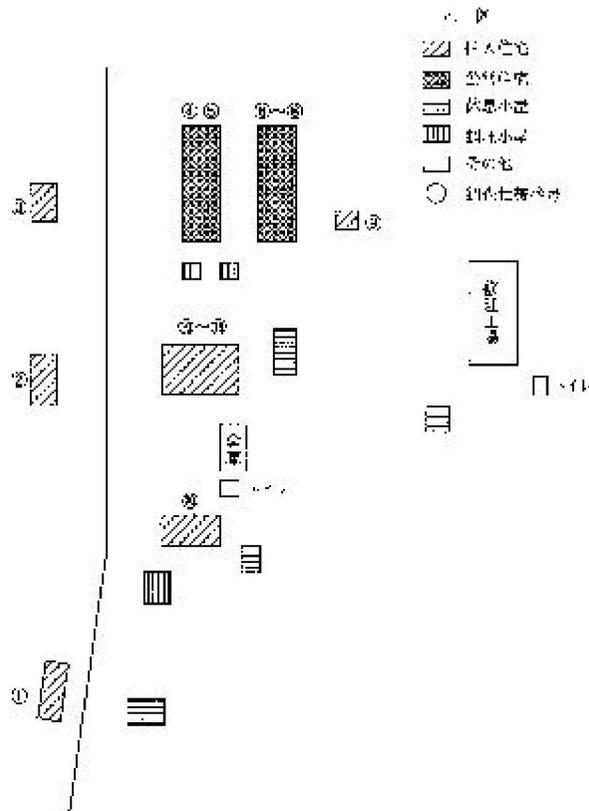


図3 ダバッチ集落の建造物

2) 建造物以外の土地利用 (図4)

集落の土地利用では、道路の他は畑(菜園)が最も重要なものであろう。この畑に多く植え付けられているものは、バナナ、砂糖キジ、タロ、キャッサバなどであるが、パイナップル、オクラ、豆類なども見られる。このほか、グラウンドや草地の面積も広い。面積はそれほど広くはないが、中心広場の果たす役割は大きいであろう。この一部は外来者の駐車場としても使われている。また、集落の周辺の多くは荒地(灌木地帯)となっている。また、南方はすぐ海に接し、ボートの利用が可能となっている。

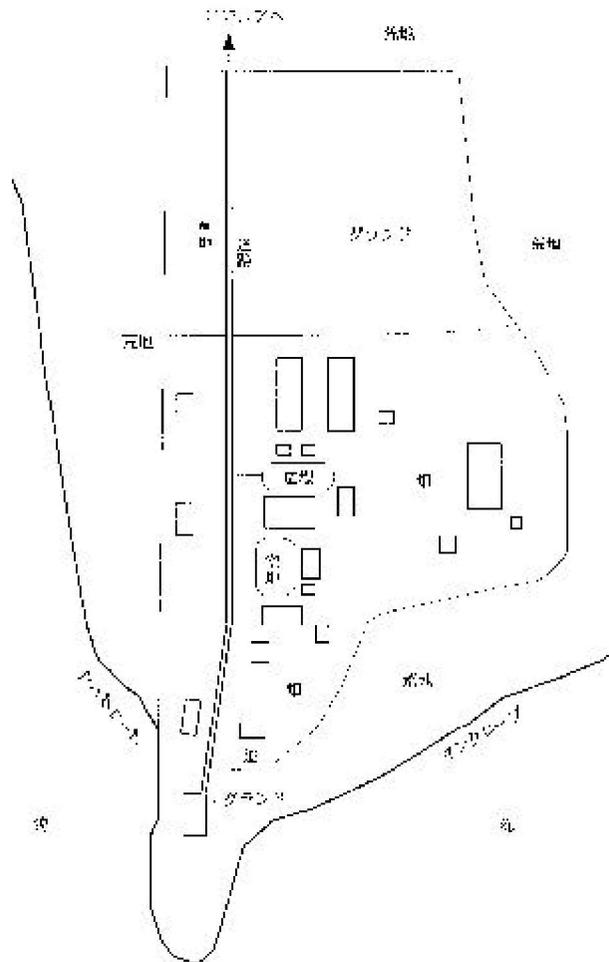


図4 ダバッチ集落の土地利用

4.3. 事例世帯の敷地空間（土地利用）

ここでは2つのサンプル世帯の敷地空間（土地利用）を提示し、その実態を把握する。

1) 事例1, No.1世帯（図5）

まず、建造物では敷地の中心のやや道路側に母屋があり、このほか車庫とポート小屋およびトイレがある。ポート小屋を持つのはダバッチーではこの家だけで、海に接している点を活かしている。

樹木ではサゴヤシの多いことが目立ち、このほかココヤシが3本、マンゴーが1本ある。また、バナナが敷地の南部と西部に植えられ、畑（菜園）に相当する部分にはタロとキャッサバが多い。母屋のまわりには芝のスペースもかなりある。

2) 事例2, No.2世帯（図6）

母屋はやはり敷地の中央よりやや道路側にあり、このほかの建造物には水浴場

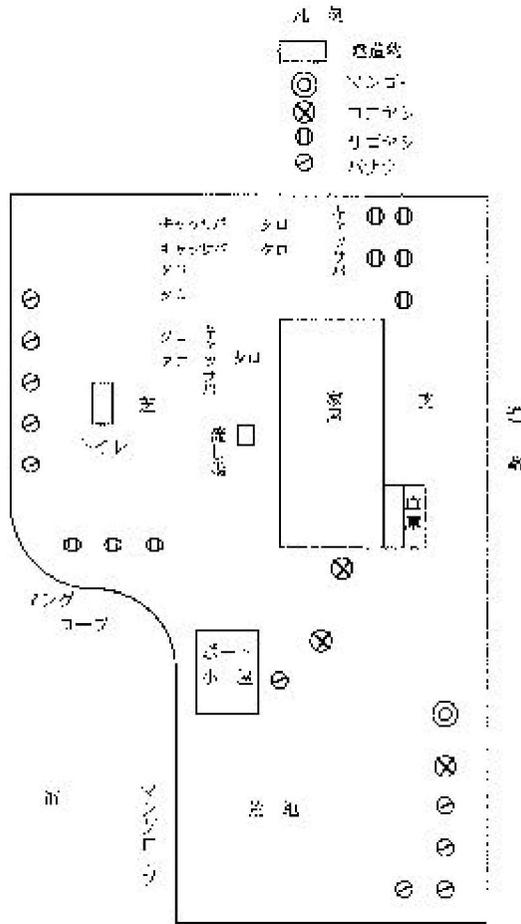


図5 No.1世帯の土地利用

(ふる場)と思われる小屋とトイレがある。母屋の西側にはヒサシが張り出しており、その下には机と椅子が置かれている。

この家の植生の大きな特徴は、集落建設以前から存在していたと思われる比較的大きなマンゴの木が多いことである。西側は灌木地帯となっていて、その延長が敷地内にも入り込んでいる様に見える。南西部の一角は手入れをした畑となっており、サツマイモ、タロ、キャッサバが作付けされ、その周辺にはバナナが植えられている。垣根代わりににはドラセナが多く使われており、母屋の近くには芝地も多い。

以上の両世帯とも一軒家で、樹木の豊かな環境の中に母屋が建てられており、一定の畑(菜園)も備えていて、かなり恵まれた世帯のケースである。

5. 結語

以上、ヤップ本島における離島民の新しい集落であるダバッチ集落について、そ

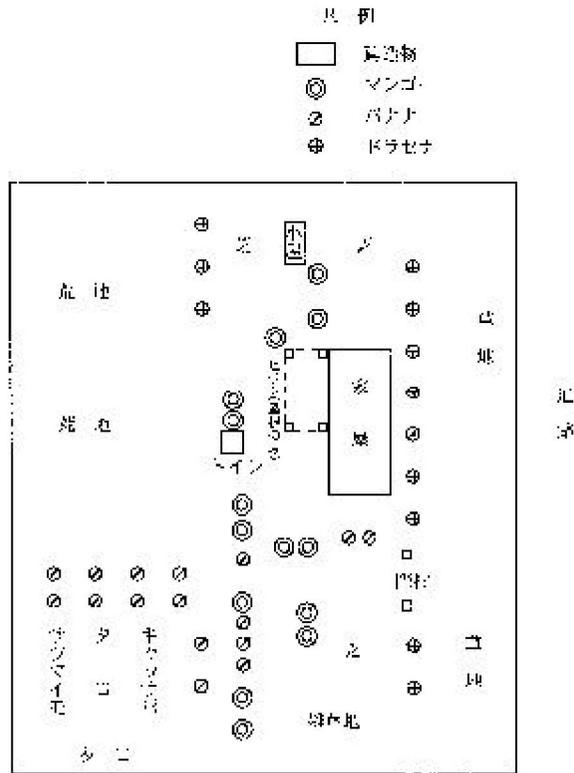


図5 No.1世帯の土地利用

の形成過程と移転をめぐる諸問題、その居住者や土地利用の実態、定住性と寄留地性の両側面を持つ現状、等々について、空間的視点をも重視しつつ、明らかにしてきた。

一般に、離島民はヤップ本島と頻繁に往来を繰り返してきており、その際の宿泊地としてマドリッチおよびコロニアの離島民の住む住宅、官舎などが利用されてきた。

この度、マドリッチに代わるものとして、ダバッチの建設が進められてきたが、マドリッチに居住していたものの移転は、現状ではほとんど進展していない様に思われ、この問題の前途は多難であろう。

建設されたダバッチが離島民の定住集落となるのか、それともマドリッチの当初からの主旨である一時的滞在地=寄留地と同様の性格のものとなるのか。これも今後の展開いかににかかっている。現状ではこの双方の性格を合わせ持っており、4. の空間認識の事例で示した No. 1 や No. 2 の世帯などは明らかに定着、永住傾向を示しているが、他方、3分の2もの住民が定住の意志を示していないことも判明した。

最後に、いくつかの問題点や今後の課題にも触れて、結びとしたい。

まず第1点は、ダバッチ集落の住人は常に変化しており、これを正確に把握することはかなり難しいという点をあげたい。この理由は、記述したようにかなりの者が一時的な滞在者であることによる。実際、筆者の調査時点でも、次の船便で帰る

とした者が6名もおり、さらに、調査を実施した3日の間でも、ある者は調査の最初の日にはダバッチに宿泊したが、3日目の日にはコロニア中心部に近いニマールのドノッチに宿泊しており、わずか3日の間でも変化が生じたりするのである。

第2点は、家族形態の理解を深めておくことである。筆者の調査の過程で、この問題点が浮かび上がってきたが、望ましいのは核家族で統一して調査を行うことであろうが、果たしてこれが可能かどうか、さらに検討を進めたい。

第3点は、出郷者調査の調査項目に関してである。今回の調査では、ヤップ州外への移動については補足的に行う程度であったが、この移動を中心にした調査を行う場合には、家族内の続柄や出郷年月、滞在期間、目的、職業、帰国や連絡の頻度、出郷先での居住等々、より詳細な調査が必要となるであろう。こうした点については、次回にその実現を果たそうと考えている。

注

- 1) Alkire W.H. 1993.
- 2) このテーマに関してはすでに報告した。田島康弘 2000.
- 3) 須藤健一 1998., Ushijima Iwao 1982. など.
- 4) ヤップ本島の土地には、場所による地位の高低があるとされる。例えば、牛島 1987. など.
- 5) Tajima Y. 2001.
- 6) ヤップ島で発行されている新聞。この記事は1999年8月20日号である。
- 7) 筆者および筆者と行動を共にした学生、末吉哲郎君のことである。
- 8) 調査遂行中にこれらを統一すべきであったが、この時点では家族概念が未整理であったため、できなかった。

文献

- Alkire W.H. 1993. Madrich: Outer Islanders on Yap. Pacific Studies Vol.16 No.2 pp31-66.
- 須藤健一 1998. ヤップの離島支配。「海人の世界」(秋道智弥編著), 197-217, 同文館, 東京.
- 田島康弘 2000. ヤップ島本島における離島民の居住地について. 総合研究プロジェクト「多島域における小島嶼の自律性」研究成果報告書, pp19-20.
- Tajima Y. 2001. Outers Moving in: The Residence of Outer Islanders in Yap Proper. Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands. Occasional Papers No.34, 25-32.
- The Yap Networker August 20,1999. Vol. 1, Issue 9.
- Ushijima Iwao 1982. The Control of Reefs and Lagoons: Some Aspects of the Political Structure of Ulithi Atoll. In: Islanders and their Outside World (Ed. Aoyagi M.) 35-75, Comittee for Micronesian Research, St. Paul's (Rikkyo) University, Tokyo.
- 牛島巖 1987. ヤップ島の社会と交換. 318頁, 弘文堂, 東京.